

沖縄県の自然談話に見られるフィラー「フン」

高橋 美奈子

1. はじめに

本誌前号の『ことば』34号で、筆者は沖縄県の自然談話に見られる特徴の一つとして、母親による標準語形の男性語使用の発話意図を明らかにしたが、もう一つ特徴的な言語形式としてフィラー「フン」の使用がある。沖縄県で生活していると、フィラー「フン」は日常的によく耳にする表現であり、県内出身の人で「フン」を聞いたことがない人はおそらくいないだろう。

そこでまず、沖縄方言の数少ない辞典として長年高い評価を得ており、何度も刷を重ねている『沖縄語辞典』（国立国語研究所編 1963、2001:212）で「フン」を引いてみると、次の語釈と用例が示されている。

hNN①（感）ふん。軽く返事する声。また、鼻の先であしらう声。

～?anii. ふん、そうか。

さらに、現在の60代以上の話者によって日常的に使われる語を収録した『沖縄語辞典—那覇方言を中心に』（内間・野原編 2006:244）を見ると、「フン」は次のように書かれている。

フン[Φu¹ n] 感 ふん。軽い返事。*声を出さなくて、唇を閉じたままフンと言うと、相手を小馬鹿にしたような返事になる。

上掲した『沖縄語辞典』（1963、2001）には「標準語引き索引」も付されているが、「はい」という見出し語を見ると、「hNN」（フン）は「はい」という応答表現の語形の一つと記されている。つまり、古くからの沖縄方言では、「フン」は応答の軽い返事を意味するにとどまっていることが分かる。しかし、このような応答表現の「フン」の使用は、沖縄に限定されるものではなく、

現在の全国共通語でも一般的に見られる応答表現であることから、「フン」が応答表現のみを表すのであれば、沖縄特有の言語表現とは言い難い。

続いて、標準語の影響を受けて生まれたとされるウチナーヤマトグチや地域共通語について書かれた文献を見てみたが、「フン」についての記載は見当たらなかった。

このように方言あるいは地域語としてのフィラー「フン」の先行研究は見当たらないものの、一つだけ、沖縄県内のラジオ放送で「フン」について論じているものがあった。FM沖縄で毎週土曜日に放送されているローカルバラエティラジオ番組「サタデーナイトは土～するべき」の中の一つのコーナー、「辞典には載っていないウチナー口講座」⁽¹⁾である。このコーナーでは、毎回、「ウチナンチュには普通なのに本土の人には伝わらない言葉」を紹介しており、2006年2月15日の放送では、「あのさあ～ふん！」について論じている。パーソナリティであるローカルタレント、川満しえんしえー（川満聡）と信ちゃん（津覇信一）によると、「フン」は、小学生などのチビッ子がリズムを刻むために使うものであり、句読点を分かりやすく聞こえるように表現したもので、いわば息継ぎであるという。また、友達を呼ぶときや相手を直すとき、念を押すときにも使われると述べている。この放送で紹介された、那覇市在住の姉妹による実際の「フン」使用例は次の通りである（文字化は筆者による）。

(1) 姉：[妹の名] は、なんで一さ、運動会の話じゃなくて一、フン、ほかの話にいたり、いたりさ、変わったりするんですか。

妹：[妹の名] はさ、早く走ったださ、[姉の名] がさ、フン、あのさ、フン、[妹の名] さ、早く走ろうとしたのにさ、[姉の名] がさ、フン、あの、<少し間>勝手にさ、フン、[妹の名] よ、あのさ、フン、勝手にさ、フン、[姉の名] さ、フン、一番になりよった。

(1)の姉妹の年齢は放送では紹介されていないので正確には分からないが、幼稚園児から小学生ぐらいの子どものと思われる。この対話をラジオで聞くと、

音声的には鼻から勢いよく呼気が出る鼻音であるため、パーソナリティの二人が言うように、確かに息継ぎのようである。また、音声を文字化した(1)を視覚的に見ても、読点を打つべきところに、「フン」が使われている。ここで注目すべきなのは、(1)の「フン」の使用が、前述した古くからの沖縄方言に見られるような応答表現としての「フン」とは用法が異なることである。(1)の「フン」は聞き手に対する返事は意味しておらず、むしろ、自分自身の発話を自分で確認する機能を持ち合わせている。

本稿では、フィラーに関わる先行研究を踏まえ、フィラー「フン」が沖縄特有の言語形式であるのかどうかを検証するとともに、沖縄の日常会話で見られるフィラー「フン」の機能を言語学的に明らかにすることを目的とする。

2. フィラー「フン」に関する先行研究

前節で、フィラー「フン」について、方言学における先行研究は管見では見当たらないと述べたが、方言語形としての捉え方に限定しなければ、フィラーについての先行研究は多数ある。中でも、2000年までの国内外の多様な学問分野で行われているフィラー研究を網羅し、整理した文献に山根(2002)がある。山根(2002:49)はフィラーを「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない、発話の一部分を埋める音声現象」と定義している。前掲した談話(1)を見ると、「フン」はこの定義に該当するため、フィラーと言って差し支えないだろう。

フィラーの先行研究の中で、実際の自然談話を用いてフィラーを分析したものに野村(1996)、山根(2002)、小林(2011)、中島(2011)がある。野村(1996)と小林(2011)では大学の講義や中学・高校教師の発話をデータとし、中島(2011)では職場での談話をデータとしているが、いずれのデータ内にもフィラー「フン」の語形は出現していない。一方、山根(2002)では、講演、留守番電話、テレビ番組の対話、電話の談話(全30談話)の4種類の談話をデータとして分析しているが、全30談話中2談話内で二人の話者のみにフィラー「フン」の使用が見られる。一人は、40歳の元看護士女性(主な居住地は岡山・神戸)で、女性の講演内の談話にフィラー「フン」が11回(全

フィルター数5491回中)出現しており、もう一人は、28歳の会社員女性(出身地は岡山)が元の職場の上司との電話の談話内で「フン」を1回(全フィルター数70回中)使用している。全談話数からみると、「フン」の使用数は多くないことから、山根(2002)での「フン」についての言及は二箇所にとどまる。一つは、フィルター「フン」は「ハイ型」として「ハイ」「ウン」「ホン」と同類と分類しており、「相づちと同じ言語形式だが、相手に対して打たれるのではなく、納得したり理解したりしたときに自分めあてに打つもの」(山根2002:50)と述べている。もう一つは、電話の談話内での「フン」使用について、28歳の会社員女性の「フン」の使用例(以下の例32のVが28歳会社員女性、Xは女性の元職場の上司)を提示しながら、次のように述べている。

話し手が自分の発話内容を確認しながら話を進めていく場合にも、フィルターは出現する。ハイ型のフィルターが典型的なものである。

例32 X:ご主人は

V:おそ

X:まだ

V:遅いんですよ いつも フン 9時とか10時ぐらい

(山根2002:185)

前掲した談話(1)の姉妹による「フン」の用法を見ると、確かにフィルター「フン」は山根が言うように自分の発話内容を自身で納得したり理解したりするために、自分目当ての自己確認機能として作用しており、「ハイ型」と分類できる。

しかし、そうであれば、なぜ前述したラジオ番組で紹介したように、「フン」が「ウチナーンチュには普通なのに本土の人には伝わらない言葉」として認知されているのであろうか。また、山根での「フン」の使用数は多い話者でも全フィルター中1.4%程度であったが、談話(1)では、わずか2発話文にも関わらず、「フン」が多用されている。このような疑問から、本稿では沖縄県内の実際の自然談話データをもとに「フン」について考察する。

3. 調査概要

本調査データは、高橋（2013）で収集した、沖縄県中南部出身の家庭内で録音された自然談話である。調査対象家族は二家族であり、家族構成と収録した談話の時間は次の表1の通りである。

表1 調査対象とした家族の家族構成と録音時間

	家族構成	録音時間
A家 (4人)	父親(40代)、母親(40代)、長男(中学生)、 次男(小学4年生)	2時間35分52秒 (全4場面)
B家 (6人)	父親(40代)、母親(40代)、長女(高校生) ⁽²⁾ 、 次女(中学生)、三女(小学3年生)、 四女(小学2年生)	2時間5分5秒 (全4場面)

談話の収集は、平成24年11月に、各家族の保護者にICレコーダーを約1週間渡し、家族の日常会話をICレコーダーで録音してもらった⁽³⁾。談話が自然談話であることを最優先したため、調査者は録音場面に介入せず、録音する場面の選択や録音時間を全て各家族の保護者に委ねた。結果として、表1に示した録音時間の音声データを入手し、全てを文字化した上で、分析データとした。

本稿では、上述した二家族の文字化データからフィラー「フン」が用いられている発話を抽出し、その機能について明らかにすることを目的とする。

4. 調査結果

4.1 「ハイ型」フィラーの出現状況

まず、山根（2002）を踏まえて上述したように、「フン」が「ハイ型」に分類されることから、本データに出現した全ての「ハイ型」フィラーを抽出し、出現回数を各話者の発話文数とともに表2に示す。

表2の発話文数を見ると、A家のデータは父、母、次男による談話、B家は母、三女、四女による談話が主であることが分かる。

表2 A家とB家の家族の発話文数と「ハイ型」フィラーの出現回数

	話者	発話文数 ⁽⁴⁾ (各家族内での割合%)	ハイ (発話文数)	ウン (発話文数)	フン (発話文数)
A家	父	547 (26.9%)	4(4)	4(4)	4(4)
	母	556 (27.3%)	0	2(2)	10(10)
	長男	264 (12.9%)	0	0	1(1)
	次男	670 (32.9%)	2(2)	2(2)	10(10)
B家	父	336 (15.0%)	5(5)	0	0
	母	505 (22.5%)	1(1)	2(2)	0
	次女	101 (4.5%)	0	0	0
	三女	557 (24.8%)	3(3)	0	11(9)
	四女	743 (33.1%)	3(3)	1(1)	1(1)

また、本調査データでは、「ハイ型」フィラーの語形は、表2で示した「ハイ」と「ウン」、「フン」の3種類のみであり、山根(2002)や小林(2011)、中島(2011)で出現した「エエ」や「ホン」などそれ以外の語形は現れなかった。しかし、先行研究ではほとんど出現しなかったフィラー「フン」にも関わらず、表2では、A家母、次男、B家三女のように「ハイ」や「ウン」よりも「フン」の使用頻度の高い話者がいるということは特筆すべき点であろう。

さらに、「ハイ」と「ウン」のフィラーは全て1発話文中に一度のみ出現している一方で、「フン」は、B家の三女のみではあるものの、9発話文中2発話文で、1発話文中に2回「フン」を使用している。

次に、各「ハイ型」フィラーが発話文中の発話冒頭(以下、発話頭と略す)、発話途中(以下、発話中と略す)、発話文末(以下、発話末と略す)のいずれに出現したかを表3に示す。なお、「単独」とは、小林(2011)で定義されている、同一話者による前発話と後発話との間に間(ポーズ)を置いて、独立して発せられた一語フィラーのことをさす。

表3を見ると、話者による各語形の頻度に偏りはあるが、「ハイ」と「ウン」については、大人・子どもに関わらず、使用が見られる。一方、「フン」については、B家では大人による使用は見られないが、A家では父にも母にも使用が見られる。また、「フン」の出現位置は、A家父や母は、発話末に多く、A家次男は発話頭、B家三女は発話中に多いことから、話者による違いが見

られる。

つまり、表3からは、家族による偏りはあるものの、フィラー「フン」は必ずしも子どもだけが使う語形とは言えず、「フン」の使用頻度が高い話者においても、出現位置の頻度に違いがあることが明らかとなった。

表3 A家とB家の話者による「ハイ型」フィラーの出現位置と出現頻度

	フィラー	話者	発話頭	発話中	発話末	単独	合計
A家	ハイ	父	2	1	1	0	4
		母	0	0	0	0	0
		長男	0	0	0	0	0
		次男	2	0	0	0	2
	ウン	父	2	2	0	0	4
		母	2	0	0	0	2
		長男	0	0	0	0	0
		次男	1	0	1	0	2
	フン	父	1	0	3	0	4
		母	1	1	7	1	10
		長男	1	0	0	0	1
		次男	10	0	0	0	10
B家	ハイ	父	3	1	1	0	5
		母	0	0	1	0	1
		次女	0	0	0	0	0
		三女	2	0	1	0	3
	ウン	四女	2	0	1	0	3
		父	0	0	0	0	0
		母	2	0	0	0	2
		次女	0	0	0	0	0
	フン	三女	0	0	0	0	0
		四女	1	0	0	0	1
		父	0	0	0	0	0
		母	0	0	0	0	0
		次女	0	0	0	0	0
		三女	0	8	3	0	11
		四女	0	0	1	0	1

4.2 フィラー「フン」の出現位置による機能

フィラーの機能については、中島(2011)がフィラーに関する先行研究をもとに次の5つの機能—(1)談話進行を管理する機能、(2)発話展開に関与する機能、(3)話し手の心的態度の表出の機能、(4)言いよどみの機能、(5)発話開始と発話終了を示す機能—に整理しており、それらの機能は出現位置によって異なると指摘している。

そこで、表3で見たように「フン」の出現位置の頻度は話者によって違い

があることから、本データについても、フィラー「フン」の出現位置による機能を分析する。発話頭に出現するフィラー「フン」は、次のA家次男の10例とA家父・母・長男各1例の計13例見られた。

(2) A家次男：<沈黙3秒>フン、父さん {うん? [父]} *、ラザニアってどういうもの?。*

(3) A家次男：フン、母さん、母さん、母さんたちの仕事ってさ、あれ、旅行バックみたいなのの中身探ってー、で、またローラーみたいなの持ってガーーーーって。

(4) A家次男：フン、★*誰?。

(5) A家次男：フン、誰が居たの?。

(6) A家母：<沈黙6秒>フン、あの子日曜日とか見かけるけど、部活行っていないの?、じゃあ。

(7) A家母：<少し間>お蕎麦は?。何食べた?。

A家次男：フン、冬瓜のそぼろ汁、4杯6杯くらい。

(8) A家父：なんで今日セカンドユニフォーム [野球部の練習着のこと] 着てるわけ?。

A家次男：フン、なんか知らんけどあった。

(9) A家母：どっから歩いて帰るの?。

A家次男：フン、[小学校名1] から [小学校名2]。

(10) A家父：なんで中間テストは?。

A家長男：フン、###*出てん [「出ていない」の意]。

(11) A家父：<少し間>なかよし学級の学級委員長はやく食べなさい。

A家次男：フン、<少し間>なかよし学級ってないけど。

(12) A家次男：<沈黙9秒>フン、[野球部コーチの姓] コーチが来たら、[友人の名] となんか変なことするってよ。

(13) A家父：<沈黙3秒>フン、身長も足りない、頭も足りない。

(14) A家次男：フン、父さんのと、しご [「仕事」の言いかけ]、なんか塗るっていったら、カンカリレー [意味不明] 塗って、休んで、塗って、

休んで、塗って、帰る [笑いながら]。

*上記の発話文例に見られる記号の意味は次の通りである。

{ } は発話途中の聞き手のあいづち、その中の[]はあいづちを打った話者、句点は1発話文終了、★は発話の途中で次の発話が始まった時点、#は聴取不能な箇所1拍分を示す。

中島(2011)では、発話頭に現れるフィラーは「談話進行を管理する機能」を担い、①発話境界の明示、発話の切り出し、発話権の維持、②前発話の補正、③話し手の心的態度の表出を示すという。上掲した発話文を見ると、(2)と(3)は呼びかけ語の前に用いられており、発話の切り出し機能を示している。また、(4)から(6)も相手への問いかけの前に現れ、呼びかけ機能を持った発話の切り出し作用を示している。(7)から(10)は、相手からの問いかけに対する返答前に「フン」を用いていることから、返答の切り出し機能とともに、問いに対する回答を考える時間を埋めるための間つなぎ語としても機能している。(11)は、相手からの命令に対しての応答前に「フン」を用いており、発話権の取得を明示し、発話を切り出す作用をしている。(12)と(13)は、長い沈黙のあとに「フン」が現れており、新たな話題提示とともに発せられていることから、発話開始を示す働きをしている。(14)についても、話者交替とともに「フン」を発しており、発話を切り出す機能を持っている。

つまり、発話頭に出現する「フン」は、話者交替が起きるときや呼びかけ・話題提供の前に使われ、発話を切り出す機能を持つとともに、相手からの問いかけや命令に対する返答の切り出しの明示とその返答を考える間を埋めるための機能を持っていることが明らかになった。

次に、発話中に出現する「フン」は、A家母1例とB家三女8例の計9例見られた。

(15) B家三女：そしたらさー、フン、余計小さくなった。

(16) B家三女：そしてからさー、貝、貝っていうかなんかさー、フン、耳にー {うん[母]} 当てたらー、ぼーってなったりとかする？。

(17) B家三女：→そういうのさー←*、あってからー {うん[母]}、聞いてみ

たらさー{うん[母]}、フン、なんかさー、ほんとにさー{うん[母]}、フン、音が、流れてた。

- (18) B家三女：で、途中でさー消しゴムおとしてからさー、フン{うん[母]}、あのー、売っているーおつけー [意味不明]、なんかー、台みたいな {うん[母]} あるさー、フン。か、なんか敷かれてたわけさー{うん[母]}、フン、こんなしてパってからー[「こんなふうにパッとやってから」の意]{うん[母]}。その下にー{うん[母]}、消しゴムがころがっていったからさー、その奥にいったからー、でからー[「だからー」の意]、★###。
- (19) B家三女：[友人の名] さー、フン{うん[母]}、めっちゃ上手にできたわけさ。
- (20) B家三女：でもさー、これでやったらさー、フン、一発でパーンってなる。
- (21) A家母：→忘れ物してよー←、フン、<沈黙2秒>忘れ物して評価が下がるの★わからんのか？。

*上記の発話文例に見られる記号の意味は次の通りである。

→ ←は前発話文との重複部分。

中島(2011)では、発話中に出現するフィラーは「発話展開に関与する機能」を担い、①間つなぎ語、②注意喚起、③話し手の心的態度の表出機能を持っているという。

本データの発話中の「フン」を見ると、B家三女による(15)から(20)までの「フン」は次の発話をどう展開するのか考えるための間をとる機能を示している。また、(16)から(19)では「フン」が聞き手のあいづち「うん」とほぼ同時に発話されていることから、上掲した山根(2002)が述べるように、自身の発話内容を自分で確認するための機能として作用している。

本データで特に注目すべき点は、(15)から(20)に現れる「フン」が間投助詞⁽⁵⁾あるいは終助詞「さー」⁽⁶⁾と共起する点である。確かに、先に見た談話(1)の妹も「フン」の前には必ず間投助詞「さ」を伴った語を用いている。上記

の例では、(18)の「か、なんか敷かれてたわけさー {うん[母]}、フン、こんなしてパってからー」の「さー」は終助詞であるが、それ以外は全て間投助詞である。

富樫(2011)は、会話と文章の両方の資料分析から、間投助詞的用法の「さ」は、情報を聞き手に強く提示する機能を持ち、会話資料でも見られる一方、終助詞的用法の「さ」は会話資料では見られず、小説や新聞などの文章資料で主に外国人男性の翻訳発話で見られるため、特定のキャラクターが使う役割語的機能を持っていると指摘している。しかし、本稿のデータは会話資料にも関わらず、終助詞「さー」の使用も見られる。この点について、大城・尚(2011)は、終助詞「さー」は沖縄地域共通語の象徴であり、全国共通語の終助詞に置き換えると「よ」に近いと述べている。また、本浜(2011)では、全国的に大きな影響を与えた沖縄を舞台としたテレビドラマ「ちゅらさん」の登場人物が多用している「さ(さぁ)」を沖縄方言の終助詞的表現⁽⁷⁾と呼び、「さ(さぁ)」が沖縄人を象徴する役割語としての機能を担っていることを指摘している。さらに、終助詞「さ」が現代の全国共通語では既に使用されなくなったことに触れ、それゆえに「さ(さぁ)」が日本的ではない指標性を持ち合わせた「沖縄らしさ」を示し、沖縄以外の人を「癒しの島」沖縄に受け入れる役割を果たしているという。つまり、終助詞「さー」は、前掲した富樫(2011)が言うように、特定のキャラクターを指標する役割語として機能しており、特に、「さー」と長音化した場合には沖縄県話者を指標する役割語として機能しているようである。ただし、富樫(2011)が述べるように、間投助詞的用法の「さ」は一般的な現代の共通語会話にも見られるものであるため、間投助詞「さー」が終助詞同様に「沖縄らしさ」を指標するとは断言できず、さらなる考察を要する。

しかし、本稿のデータ分析からは、「さー」が間投助詞・終助詞のいずれに関わらずとも、「～さー、フン」という連なりが、これまでの他の文献データには見られなかったことから、少なくとも沖縄の自然談話のみに出現する言語表現の特徴であると言えるだろう。

さらに、本稿のデータを見ると、出現位置に関わらず、「さー」と共起した

「フン」を使用するのは子どもだけである。例えば、上記(21)のA家母の発話中の「フン」を見ると、その前の語は「さー」ではなく、「よ」である。また、(21)のA家母による発話中の「フン」は、B家三女の「フン」のように単に間つなぎ語というよりは、「フン」の前後で「忘れ物して」という表現を繰り返し、「フン」の後に聞き手を咎める表現が続くことから、聞き手への注意喚起を強調する機能を示している。つまり、発話中に出現する「フン」を見ると、大人と子どもではフィラー「フン」の機能が異なり、子どもの場合は「さー」と共起しやすいことが明らかとなった。

続いて、発話末に出現する「フン」はA家母7例、A家父3例、B家三女3例、B家四女1例の計14例である。

(22) A家母：勉強したらー？、フン。フン。塾入っている子はいっぱい居るんですけど、フン。わからんの？、あんだ。

A家次男：じゃあ塾入ればいいさー、月(げつ)ー…。

(23) A家母：だから、鍵持って、鍵自分で締めないから、鍵持ってって言うてるだろー、フン。お母さん、忘れ物しても持っていけないって何回言ったら分かるの？。

(24) A家母：これどんなしてこれあつし[意味不明]、フン。絵の具がこんないっぱいはねてあるの？、制服に。落ちないんだけど。

(25) A家母：お母さんできないよ、フン。

(26) A家母：<沈黙3秒>今時の子はやらんと。お母さんも小さい時からやってたよ、洗い物、<少し間>フン。

(27) A家父：<沈黙3秒>フン、身長も足りない、頭も足りない、フン。

(28) A家父：→食べてみたら←、こんなワッター [「我々」の意] お父が買ってきたチキンも美味しくなかつただろー、★ケンタッキー、フン。

(29) A家父：<沈黙2秒>お前運動しないからお腹すかないんじゃない？、<沈黙2秒>フン。

(30) B家四女：あつ、まじな？、フン。

(31) A家母：誰？、フン。

(32) B家三女：なんかさー、フン。

(33) B家三女：じゃあさー、フン。

(34) B家三女：で、途中でさー消しゴムおとしてからさー、フン{うん[母]}、
あの一、売っている一おつけ一 [意味不明]、なんか一、台みたい
な {うん[母]} あるさー、フン。か、なんか敷かれてたわけさー {う
ん[母]}、フン、こんなしてパってから一 [「こんなふうパッとや
ってから」の意] {うん[母]}。その下に一 {うん[母]}、消しゴム
がころがって行ってからさー、その奥にいてから一、でから一 [「だ
から一」の意]、★###。

中島(2011)によると、発話末に出現するフィラーは、言い淀み・言いさしの標識あるいは発話終了を示すフィラーとしての役割があるという。

(22) から(24) に出現した発話末の「フン」の後には、話者交替は行われておらず、発話終了を示す機能とは言い難い。むしろ、「フン」の前後に、聞き手への提案や問いかけを表す表現が用いられていることから、これらの「フン」は、発話権の維持を伴いながら聞き手への注意を念押しする機能として作用している。また、これらの「フン」の前には、聞き手への問いかけや確認表現が用いられているが、発話行為としては命令や指示を意図しているため、相手からの返答を待たず、「フン」による自己確認で自己完結しているのが特徴である。(25) から(29) の発話末の「フン」は、その後、話者交替が行われているが、(22) から(24) の「フン」の用法と同じく、聞き手への注意喚起や念押しを示す機能を持っている。例えば、(25) から(27) は「フン」の前に直接的な断定表現が使われており、「フン」はその断定を強調する働きを持つ。(28) と(29) については、言語形式としては確認表現であるが、発話意図としては話者の断定を意味しているため、その後の発話文に聞き手からの返答が見られない。一方、(30) と(31) の「フン」は言語形式通り、「フン」の前は単純な問いかけや確認であることから、発話終了の機能を示していると言える。

次の(32)と(33)の「フン」は、発話末に出現しているが、発話中に出現し

た(15)から(20)の「フン」の機能と同じく、間つなぎ語として作用しており、間を埋める間に発話権が奪われたことで、結果的に発話末に「フン」が出現した例である。(34)の「フン」も発話末に出現しているが、発話権を維持するために、間つなぎ語として「フン」を使用している。(32)から(34)の例を見ても、間つなぎ語として機能している「フン」は「さー」と共起していることが分かる。

最後に、単独で出現した「フン」の使用例を分析する。本データでは、単独の「フン」はA家母の1例のみ観察された。

(35) A家母：勉強したらー？、フン。フン。塾入っている子はいっぱい居るんですけど、フン。わからんの？、あんた。

本データ中で「フン」が連続して用いられたのは(35)の1例だけである。小林(2011)の教師の発話にも「ハイ型」フィラーが単独で出現しているが、それは「話者と聞き手の間に微妙な空間的・心理的距離があり、聞き手が話者に直接的に答えない、つまり講演のような場で、話者が談話進行のためのバランスやリズムをとるためのもの」(小林2011:120)と分析しており、日常談話では出現しにくい用法であるという。(35)の例を見ると、「フン」の前後の発話が、講演談話のように話者から聞き手へ一方的で、「フン」の後には畳みかける提案や問いかけが続くことから、聞き手からの返答を許さない威圧的な談話進行の管理機能として作用している。このような「フン」の用法は、発話末に現れた(22)から(29)の「フン」の用法と類似しており、子どもの「フン」の用法には見られない大人特有の「フン」の用法と言える。

5. おわりに

以上、沖縄県の自然談話に見られるフィラー「フン」の出現頻度、出現位置とその機能について分析を行った。結果として、フィラー「フン」は他府県出身者による談話にも出現していることから、「フン」のみでは必ずしも沖縄特有の言語形式とは言えないが、「～さー、フン」の連なりは、沖縄特有の言語形式と言えることが分かった。また、フィラー「フン」は必ずしも子ども

も特有の言語形式ではなく、大人にもその使用は見られるが、フィラー「フン」の出現位置と機能を見ると、大人と子どもではその用法が異なることも明らかになった。子どもは「さー」の後に「フン」を用いて、間つなぎ語としての機能で用いる一方、大人は断定や指示表現の後の発話末に「フン」を用いて、聞き手からの返答を許さない注意を強調する念押し機能として用いている。「さ」に関する先行研究を整理した富樫(2011:142)によると、「さ」は「聞き手に提示しようとする情報に対して責任を伴った判断(判定)を下していない」という先行研究に共通した本質があるという。このような責任回避として機能する「さ」に、さらに次の発話を考える間を埋めるための間つなぎ語「フン」を併用することにより、情報処理能力が不十分な幼児の発話を想起させる特徴となるのであろう。冒頭で紹介したラジオパーソナリティの「フン」の分析は、当たらずといえども遠からずという結果となった。

最後に、本稿では分析が及ばなかったが、本稿のデータ内には、古くからの沖縄方言「フン」が意味する返答の用法は見られず、返答は「ウン」を用いていた。今後の課題として、応答表現の「フン」とフィラー「フン」の関係性についても明らかにしたい。また、本稿では話者の多くが「フン」とそれ以外の「ハイ型」フィラーを併用していたので、それらの使い分けについても明らかにする必要があるだろう。

注

- (1)このコーナーは、FM沖縄で放送されているラジオ番組「サタデーナイトは土～するべき」内の一コーナーとして、2006年1月11日から2009年2月14日まで放送された約5分程度のコーナーである。人気のあったコーナーだったため、終了後である現在も、この番組のHP(<http://www.fmokinawa.co.jp/dosuru/>)内の「辞典には載っていないウチナー口講座」のリンクからpodcastで聴くことができる。
- (2)家族構成では長女がいるが、B家の録音したデータ内に長女の発話はなかったため、本調査の分析対象からは外している。
- (3)本調査のデータは、著者指導のもと、仲宗根晴香さん(2012年度琉球大学教育学部生涯教育課程子ども地域教育コース卒業生)とともに収集したデータである。また、データ

の文字化については、研究補助員の玉城あゆみさんと平仲愛里さんにご協力いただいた。録音データをご提供くださったA家とB家の皆様とデータの収集と作成にご協力くださった方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

- (4)表2で示した発話文数であるが、1発話文の定義は、自然談話データを定性的ならびに定量的に分析できるよう考案された、宇佐美(2011)の『基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2011版』に従い、原則、一人の話者による「文」を成しているものと捉えられるものを「1発話文」とし、構造的に「文」が完結していない発話の場合は、「話者交替」と「間」があるかどうかで「1発話文」と認定している。なお、本データ中に引用している談話例では、1発話文の終わりに句点「。」を打っている。
- (5)終助詞と間投助詞の区別については、山田孝雄が1929年に初めて、文中・文末ともに用いられるものを間投助詞、文末にのみ用いられるものを終助詞と、別の助詞として位置づけたが、双方の「聞き手を意識する」働きを持つという共通点ゆえに、現在までその捉え方には諸説あるという(伊豆原 2011)。さらに、「ね」や「さ」については、実際の会話では終助詞と間投助詞という文法的な区別が不明瞭であり、また、区別することにより相互行為の中における参加者間の意味のまとまりを捉えることができなくなるので、「相互行為詞」と呼ぶことを提案している(森田 2007) 論考もある。
- (6)上掲した『沖縄語辞典』(1963, 2001: 451)では「さ」を「接尾辞および接尾的な諸種の付属形式」と分類し、『沖縄語辞典—那覇方言を中心に』(2006: 110)では「助詞」と分類しており、それ以上の品詞についての記載はない。
- (7)本浜(2011)は「さ(さぁ)」を沖縄方言の終助詞的表現と名付けているが、本浜が挙げた「さ(さぁ)」の例文には終助詞だけではなく間投助詞の例もいくつか見られるので、本浜が言う「沖縄らしさ」を指標する「さ(さぁ)」の役割語的機能は終助詞に限らないと思われる。しかし、本浜(2011:189)が挙げた(13)「そろそろ帰らないといけないかもしれないからさ」のような間投助詞的用法の「さ」については、全国共通語との区別が不明瞭であり、「さ」が「沖縄らしさ」を指標しているかどうかは疑問が残る。

付記

本稿は平成25～平成27年度科学研究費補助金基盤研究(C)「現代沖縄社会における自然談

話の分析研究」(研究代表者 高橋美奈子、課題番号 25370435)の助成を受けて行ったものの一部である。

参考文献

- 伊豆原英子(2011)「間投助詞はどのように位置づけられてきたか」『愛知学院大学教養部紀要』58-3 pp. 1-12 愛知学院大学教養教育研究会
- 宇佐美まゆみ(2011)『基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2011版』<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj2011.pdf>
- 内間直仁・野原三義編(2006)『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』研究社
- 大城朋子・尚真貴子監修(2007)『日本語バイリンガルへのパスポート—沖縄で日本語教師をめざすあなたへ』沖縄国際大学日本語教育教材開発研究会
- 国立国語研究所編(1963)『沖縄語辞典』財務省印刷局
- 国立国語研究所編(2001)『沖縄語辞典』(9刷)財務省印刷局
- 小林美恵子(2011)「授業談話データベースによる実態調査—フィルアーの様相—」『ことば』32 pp. 109-122 現代日本語研究会
- 高橋美奈子(2013)「母親という役割からみる話しことばの実態—現代沖縄社会における自然談話データの分析から—」『ことば』34 pp. 15-28 現代日本語研究会
- 富樫純一(2011)「終助詞「さ」の本質的意味と用法」『日本文学研究』50 pp. 138-150 大東文化大学日文学会
- 中島悦子(2011)『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・あいづち・フィルアー・無助詞』おうふう
- 野村美徳子(1996)「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語—「フィルアー」に注目して—」『文教大学教育研究所紀要』5 pp. 91-99 文教大学
- 本浜秀彦(2011)「「沖縄人」表象と役割語—語尾表現「さ」(「さぁ」)から考える—」金水敏編『役割語研究の展開』pp. 181-193 くろしお出版
- 森田笑(2007)「終助詞・間投助詞の区別は必要か—「ね」や「さ」の会話における機能」『言語』36-3 pp. 44-52 大修館書店
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィルアー』くろしお出版
- (たかはし みなこ・琉球大学)